博士（文学）学位請求論文審査報告要旨

論文提出者氏名	平田　彩奈惠
論　文　題　目	『源氏物語』と歌ことば表現 ――連想と変容――

審査要旨

本論文は、『源氏物語』本文にみられる歌ことば表現、ならびに『源氏物語』を受容した後世の作品における歌ことば表現の変容という、二つの課題に関する研究をまとめたものである。論文の構成は、前者を論じた第一部の六つの章と、後者を論じた第二部の四つの章から成る。

『源氏物語』では、795 首の作中和歌のほかに、いわゆる「引歌(ひきうた)」をふくむ歌ことば表現が多く見いだされる。それらに関しては、平安末期に成立する『源氏釈』以来のあまたの注釈書、および諸論考において、さまざまな指摘、検討がなされてきたが、それらの大半は『源氏物語』の本文（地の文･会話文･消息文）に見える歌ことばの元の歌を特定しようとするものといえる。これに対して論文提出者は、本論文の第一部で、当の歌ことばが特定の歌だけでなく、複数の歌を想起させることがある点に注目する。それは、歌ことば表現にともなう連想性への留意であり、さらにそこから『源氏物語』本文の有する範列的な拡がりをとらえようとする、あらたな試みへとつながる。

一方の第二部では、上述のような歌ことばのもつ連想性が重層する『源氏物語』の物語世界が後世において受容されるとき、歌ことば表現はいかに踏襲されるのか、またされないのか、あるいはいかに変容するのか、ということを論じている。『源氏物語』の一千年にわたる受容はきわめて多彩であり、その研究も今日では活発化しているが、本論文は歌ことばに焦点を絞った点が特徴的である。

以下、章ごとに論述の要点を整理しておく。

「第一部　『源氏物語』における歌ことば表現」では、まず**「第一章　『蜻蛉日記』下巻の歌ことば表現 ――和歌の知識共有に基づく技巧として――」**において、引歌のもっとも早い例を示す『蜻蛉日記』をとりあげる。ただし、検討の対象は下巻である。そこでは素朴に歌の一節を引くのではなく、『源氏物語』に先駆けて歌ことばの複雑な利用が看取されるという。つづいて**「第二章　『源氏物語』の朱雀院と「この道」」**は、『源氏物語』での引用回数が最多の「人の親の心は闇にあらねども…」という藤原兼輔歌をめぐる論である。朱雀院が関わる局面でこの歌が用いられる際の引用の「型」が他と異なることの意義を検討し、あわせて一つの歌からのさまざまな引用の「型」がありうることなどを論じる。**「第三章　『源氏物語』末摘花巻における「色こきはなと見しかども」」**は、「末摘花」巻にみえる「色こきはなと見しかども」という引歌らしき表現の出典について、『源氏釈』以来の説と対峙しつつ、「紫の色こきときはめもはるに…」という著名な『古今集』歌を「色こきはな」に改変し、「花」から「鼻」の物語へ、かつは「紫」から「紅」へと転じた諧謔性を指摘する斬新な論である。あわせて、従来の研究が『源氏物語』本文における範列的な拡がりをとらえてこなかった点を批判する。つづく**「第四章　『源氏物語』の「なでしこ」「とこなつ」と「垣」」**では、「なでしこ（撫でし子)」と「とこなつ」、そしてそれらに関わる「垣」に着目し、特に紫の上に関係する場面でこれらの語が連関していることをとらえるとともに、歌ことばの連想性を手がかりとすることで、従来は和歌的な表現としてとらえられてこなかった箇所が見いだしうると論じる。**「第五章　花散里巻の「垣根」に植えられた「卯の花」の可能性」**は、「花散里」巻の頻出語「垣根」に着目した際に、この巻の本文にはあらわれてこない「卯(う)の花」が想起されること、またそこには「憂(う)し」が通底しているということなどを論ずる。**「第六章　「雲居の雁もわがごとや」考 ――「出典未詳歌」の捉え方の一例として――」**では、「少女」巻の「雲居の雁もわがごとや」という部分について、『源氏釈』以来指摘されてきた出典未詳歌からの引用とは考えがたいことを述べた上で、『古今集』の「人を思ふ心はかりにあらねども…」という歌に着想を得た可能性を示しつつ、『源氏物語』本文においては典型的な引歌のように

氏名　平田 彩奈恵

見えながら、実は「引歌もどき」というべき表現がありうるということを論じている。

次に、**「第二部　後世における『源氏物語』受容 ――歌ことば表現の改変を中心に――」**においては、まず**「第一章　『狭衣物語』における「見えぬ山路」――『源氏物語』における「山路」とのかかわり――」**で、平安後期の『狭衣物語』における「見えぬ山路」という歌ことば表現が、『源氏物語』における同じ表現を用いた場面と同様に機能していること、また「宇治十帖」との関わりの深さなどをとらえている。次に、江戸時代の受容をとりあげる**「第二章　梅翁源氏における引歌 ――『雛鶴源氏物語』を中心に――」**では、いわゆる俗語訳の一つ、梅翁源氏における歌ことば表現の変容をとらえ、和歌の知識がなくても物語内容を把握したり、歌ことばとの関係を解したりできるような工夫がなされていることを指摘している。**「第三章　田辺聖子『新源氏物語』における「闇」――「恋の闇」としての利用――」**では、『源氏物語』にもしばしば用いられている「闇」という語が田辺の翻案小説では一貫して「恋の闇」の意であらわれてくることをとらえている。それは『源氏物語』の歌ことば表現からの意図的な改変として理解されるという。最後の**「第四章　宝塚歌劇『源氏物語千年紀頌 夢の浮橋』に見る『源氏物語』受容 ――古典と現代文化を繋ぐものとしての「うた」の利用――」**では、宝塚歌劇という大衆演劇において、『源氏物語』に用いられる特徴的な歌ことばを用いつつ、一方では『源氏物語』にない歌ことばをあらたに取り入れるなどの巧みな変容が看取されることを論じている。

以上が本論文の要点である。従来の『源氏物語』研究が看過してきた歌ことばの連想性に着目し、その範列的な拡がりをとらえた点、また受容研究としてはこれまでに解析されることのなかった歌ことばの変容という問題に切り込んでいる点などに、本論文の学術的な意義がみとめられるだろう。ただし、審査委員からはあわせて次のような課題も指摘された。

- 和歌という類型性の文学との関わりで、『源氏物語』の歌ことば表現がいかに物語内に持ち込まれているのかということを深く論じてほしい。
- 和歌に関わるリテラシー、特に和歌知識の共有ということが『蜻蛉日記』下巻をとりあげた第一部の第一章では論じられているが、『源氏物語』成立期についてもこの問題を探究してほしい。
- 第一部の第一章、『蜻蛉日記』の論考は、今後いっそうひろげてゆくことが可能であろう。
- 第一部の第五章、「花散里」巻の本文中に「卯の花」が記されていないという「不在」の意味については、もっと正面から論じた方がよいのではないか。
- 第二部の第三章、田辺聖子作品の「闇」については、『源氏物語』に関わらない他の田辺作品の調査も不可欠であろう。また、井原西鶴との関わりも探る必要があろう。
- 『源氏物語』の影響を受けた作品、また翻訳・翻案の数は膨大なので、第二部で扱った四作品は氷山の一角にすぎない。全体を扱うことは無論困難だが、受容史の全体像との関わりを示せないか。

このように今後にのこされた課題もあるわけだが、本論文が、『源氏物語』本文中の歌ことば表現と、その受容作品における歌ことば表現の変容に関する研究としてあらたな知見を提示していることは明らかなので、本論文は課程による博士学位の授与にふさわしいものと判断した。

公開審査会開催日	2019 年 1 月 29 日			
審査委員資格	所属機関名称・資格	氏名	専門分野	博士学位
主任審査委員	早稲田大学文学学術院・教授	陣野 英則	平安時代文学、物語文学	博士(早稲田大学)
審査委員	早稲田大学文学学術院・教授	兼築 信行	和歌、文献学	
審査委員	早稲田大学教育・総合科学学術・教授	福家 俊幸	平安時代の散文学	博士(早稲田大学)
審査委員				
審査委員				